

おじさんキッチン楽しみの予感

佐藤進（上岸）

本号では、佐藤進さんが投稿してくださった「おじさんキッチンの体験レポート」をご紹介します。佐藤さんありがとうございます。

おじさん料理人連中が登場

6月下旬のある日。朝10時前、会場の町改善センターに年配のおじさん連中が15人前後集結する。受付では料理スタッフである保健師・栄養士計4人が参加費100円（安い）を徴収し、参加者の血圧を測定している。

午前10時に開会となり、新しく加入した人や同じ町内でも知らない人がいるため、自己紹介をする。そして栄養士による本題の「今月のレシピ」説明に入る。今回はたけのこごはん、レバニラいため、すまし汁の3品。事前の予定ではゴーヤチャンプルーだったが、少し時期が早いということでレバニラいために変更に。でも生徒のおじさん連中に、そのことで文句を言う人

初めての経験戸惑う場面も

最初は説明書も置いてあるが、わたし以外の大ベテラン3人は、それをちらつと横目で見ただけ。ときばきと調理を進めている。わたしが何をしたらいいかと迷っていると、担当指導員が「佐

は一人もいない。かくして細かな説明は終わり、おじさん連中は三角きんやフード帽子をかぶり、名札を首にかけたエプロン姿に大変身。格好だけはさまになり、いよいよ調理場に出陣した。各班4から5人の4グループにわかれ、保健師・栄養士各1人の指導で、ご飯を研いだり、鍋の水をわかしたり、野菜を切ったりと下準備にとりかかる。

藤さん、塩を小さじ2分の1、しょうゆと砂糖それぞれ3杯をお湯の中に入れてください」と声がかかる。何とかその作業を終えると、またウロウロ。そのうちに、料理に使った皿や鍋、まな板などが流し場に出されてきた。「これならわたしにもできる」と、それらに洗剤を付けてきれいに洗った。

楽しい会話もスパイスに

しばらくすると、皆さんの協力で3品の料理が出来上がり。グループ別に完成した料理を並べて食事会へと移る。自分たちが作った料理を批評し合いながら、それぞれの料理を味わった。

おなかもすいているため、どの料理もおいしくいただいた。このおじさんキッチンは、知らない人とワイワイガヤガヤ料理を作る楽しい教室。日ごろ家で包丁など握らないわたしが、何か一つでもレシピを覚えれば、今後役に立つこともあるだろう。

お便りありがとうございます 皆さんの声を紹介

おじさん連中は三角きんやフード帽子をかぶり、名札を首にかけたエプロン姿に大変身。格好だけはさまになり、いよいよ調理場に出陣した。各班4から5人の4グループにわかれ、保健師・栄養士各1人の指導で、ご飯を研いだり、鍋の水をわかしたり、野菜を切ったりと下準備にとりかかる。



物損交通事故などの 相談はホットラインまで

【問】 県司法書士会 ☎054 (289) 3704

自動車などの事故で「過失割合に納得できない」「事故相手が保険に入っていない」「修理代をきっちり請求したい…」そんなときには物損交通事故ホットラインまでご相談ください。争いの金額が140万円以内の、主に物損事故の損害に関する相談を受け付け

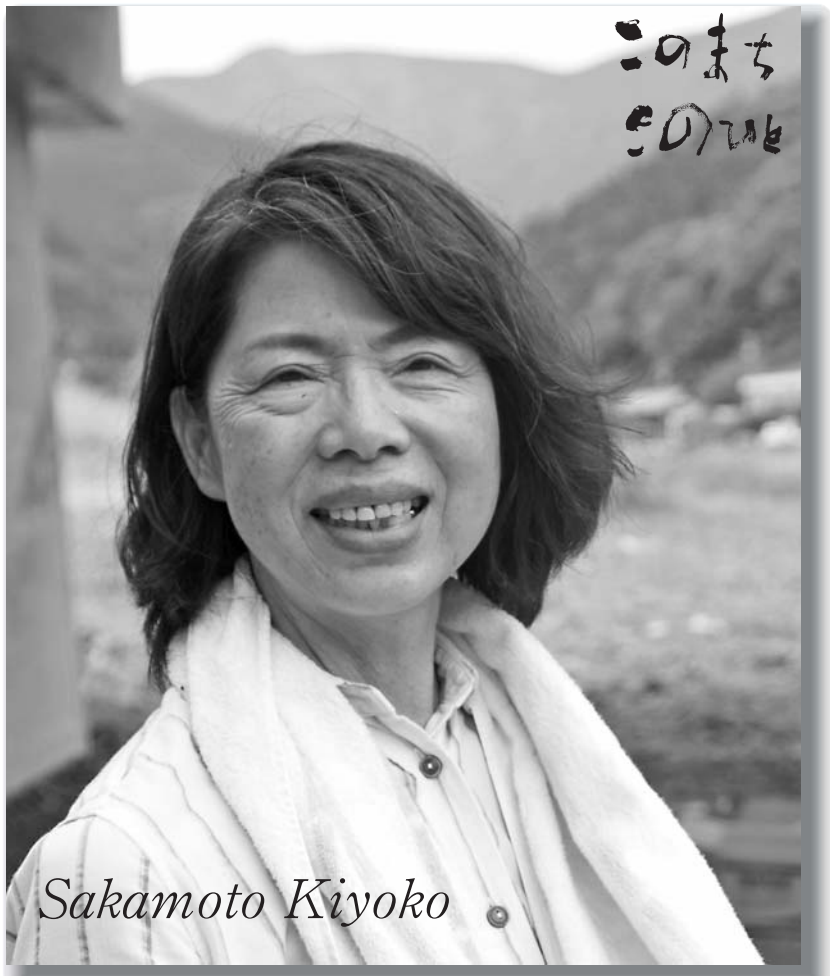
ます。相談の方法は、電話による相談、面接による相談の2種類。どちらも相談無料。予約は必要ありません。
日時 8月29日(日) 午前10時～午後5時
場所 県司法書士会館 〒422-8062 静岡県駿河区稲川1-1-1

「子どもたちの発想にいつも驚かされる」 陶芸を通して人と人の触れ合いを生む 坂本喜代子 さん

中央小学校で陶芸の指導をしている（高郷）



完成した土器は、まるで出土したばかりのような雰囲気。それぞれの形に個性がある。



Sakamoto Kiyoko

中央小6年生9人は6月9日、長尾川の河川敷で土器を焼く体験学習を実施した。同学年では現在、歴史を学んでおり、今回の体験もその一環。縄文時代のことを学んでいるとき、子どもたちから「自分たちで土器を作ってみよう」との声が上がって実現した。

担任の速見和司教諭も子どもたちと同じように考えていたという。「わたしも元々、子どもたちに昔ながらのやり方で土器を作ってもらおうと思っていました。そこで4月下旬に実施した授業参加の日に、保護者と一緒になって土器を作りました。今回焼いた土器は、そのときの物です」。

この日指導に当たった坂本喜代子さんは中央小で陶芸の講師を務めている。同小で年6回、駿園学園（町外）で年6回、そのほかにも知り合いに頼まれればその都度、陶芸を教えに行くという。「わたしは趣味が高じて陶芸をやっています。泥んこ遊びの延長みたいなもの。わたしのやり方でいいよって言うってくれる人の所に教えに行きます。陶芸をやる人の輪が広がっていくのがうれしいんですよ」と目を細めていた。

午前9時過ぎから始まった野焼きは、約2時間かけて実施された。火を絶やさないように見つめる子どもたち。火の中に興味津々だ。どんな風にできあがるか、とても待ちきれ

ないといった様子。

午前11時過ぎ。火は消され、土器が慎重に掘り出された。1個1個、姿を現すたびに歓声にわく子どもたち。「すごい。ちゃんとできてる。良かった」と、喜びや安堵の声が上がっていた。

喜代子さんは、子どもたちが作る物にいつも驚かされると言う。「大人が作ると、どうしても似たような物になっちゃうけど、子どもたちは違う。発想の豊かさに、いつも驚くんです。それぞれの子の味という個性が出る。思いが形になって表れるんですよ。良い意味で枠を外れるっていう感じかな。自分を表現できると素晴らしいなって、いつも感心してしまうんです」。

子どもたちの元気な姿に、自分の方が元気をもらおうという喜代子さん。「いつも楽しみに思っているのは、こつちの方なんですよ」と、優しい目で子どもたちを見つめた。



完成した土器と。子どもたちと一緒ににっこり。

voice